洛西

「向日庵」の営み　未来へ

「自分の内にささやく静かな小さな声」

英文学者で民芸運動を草創期から支えた故寿岳文章氏（1900～92年）が向日市上植野町に構えた邸宅「向日庵（こうじつ）」の保存に向け、NPO法人の設立準備が進む。同市内で4月30日にあった「NPO法人向日庵　設立の会」で、寿岳氏の業績に詳しく同法人理事長となる中島俊郎・甲南大文学部教授が講演。向日庵が発信してきたメッセージの重なりや文化的価値を語った。内容を詳録する。（本田貴信）

NPO法人「向日庵」の設立に向けた集会で、中島教授の講演に聞き入る参加者たち（向日市上植野町・西向日コミュニティセンター）

保存向けNPO設立へ甲南大・中島教授　文化的価値語る

中島俊郎・甲南大文学部教授

なかじま・としろう
1949年生まれ。甲南大人文科学研究科博士後期課程修了。93年から現職。大学院生時代、担当教授の縁により向日庵で、故寿岳文章氏から英文学などの指導を受ける。編著書「岡本　わが町」（神戸新聞総合出版センター）で寿岳氏について記している。

寿岳一家は、個々が優に研究対象になるような存在だ。

寿岳氏は日本の書誌学の先駆者。英文学研究、和紙研究に携わり、ダンテの「神曲」を翻訳して亡くなった。妻の故しづ氏は自伝的小説「朝」やエコロジーを主軸とする翻訳物を出版。長女の故章子氏は一家を代表するスポークスマンで、歴史や女性学、京都の暮らしなどの観点から多くの著作を残した。天文学者で長男の故潤氏は数多くの論文が国際的な論文集に載っている。

個々の方向性は違うが、その全体像である向日庵は、非戦の誓いや人類愛、自然との共存や相互扶助の尊さを訴えかけてくる。

向日庵は戦後、駐日英国大使などが訪れる国際交流の場となった。大使は寿岳氏と分かち合った仏教の知見に立ち、東西文化の橋渡し役を果たした。

寿岳氏は、外国語の翻訳を通じて文化を橋渡しした。名著の翻訳に索引が付かない悪弊を嘆き、索引が目次と並んで作品の表玄関に相当すると痛感していた。こうした造本の思想は、インターネット検索で単語を手がかりに内容を把握することが求められる現代にあっても、今日的な重要性を持つ。

しづ氏は、向日市の竹林の美しさ、しなやかさを何度も書いた。自然との交わりが生きる力となって人間に感化力を及ぼす。このような自然観を紹介した翻訳本が、今も版を重ねていることは私たちの誇りと言える。

では、自然が最も相対化される戦争に一家はどう向き合ったか。

寿岳氏は、1937年の日華事変（日中戦争）発生時の学会で、聖書や賛美歌集を紹介し、平和への願いを込めて抵抗を示した、と後に振り返っている。そうした態度は、寿岳氏を孤立化させた一面もあるだろう。戦後日本の無反省な態度を寿岳氏はいぶかしく感じていた。

一家は、言葉を大切にする人たち。だからこそ、言葉が戦争に向かった時の大きな危険性に敏感だった。

章子氏は著作で、兵士が残した辞世や戦争文学によって、いかに第2次世界大戦というものが甘くごまかされたのか。情緒が一人歩きする時の無防備さと罪がありありと分かる資料になっている、と記す。日本語に潜む「滅びの美学」は美しく酔いやすいが、いかに危険かを戒めた。

今後、親子2代のメッセージを包む向日庵の保存を目指す。この家にこもった気持ちをおもんぱかることが重要と思う。寿岳夫妻が道標としていた「自分の内にささやく静かな小さな声」。文化史を追究する営みとは、簡単に消えてしまう、このか細き跡をたどり、未来につなぐことだ。

自分の内の小さな声に耳を傾け、自分の声で発信する。その営みこそが寿岳氏から託された糸。残された私たちが、次世代にバトンタッチすることが必要と考える。

向日庵　1933年、阪急西向日駅近くの住宅街に建築された木造2階建て約130平方㍍。大山崎町の実験住宅「聴竹居」の設計で知られる京都帝国大教授故藤井厚二氏に師事した故澤島英太郎氏が設計を手がけた。民芸の意匠を取り入れた近代和風建築として高い評価を受ける。

深層おとくに